

### 「猫を愛した著名人たち」

今回は世界的な著名人の中から猫のペトラバーの逸話をご紹介します。彼らが心から猫をかわいがっていた姿を想像すれば、どんな著名人でも私たちには身近に感じられてきます。そこで愛された猫たちが彼らの創造性に刺激を与え、あるいは精神的な支えとなり、もしかすると猫たちが彼らの偉業に大きな貢献をしていたのかもしれない。

1800年代のイギリスの小説家姉妹として有名なブロンテ姉妹はいつも 1-2 匹の猫を飼っていたそうです。有名な作品「嵐が丘」の作者として知られているエミリーは、エッセイの中でも自分の猫について描写しながら、自分が真の愛猫家であると宣言しています。猫は他のどんな動物よりも人間的な感覚を持っていると彼女は感じていたようです。

米国の詩人エドガー・アラン・ポーも愛猫家の一人。彼はしょっちゅう肩に猫をのせながら、仕事をしていたといわれます。代表作品の「黒猫」は、猫を大事しなければいけないという彼自身の気持ちの中から生まれた作品であるかもしれません。

猫を肩にのせながらの執筆はさぞかし肩もこつただろうという余計な心配をしてしまう人物がもう一人います。それは、ノーベル平和賞を受賞したアルベルト・シュバイツァー博士。博士の猫、シージーは博士の左腕で眠るのが好きだったのだそうです。左利きだった博士は、利き手の左側を猫に譲り、しばしば右手にペンを持ち、仕事をしたとのこと。小さな命への優しさを感じられる話です。

船にも猫を乗せ、妻よりもその猫に愛情を注いでいたという英国海軍の英雄はホレーシオ・ネルソン提督。妻と不仲になった原因は、他の女性ではなく猫に対する妻の嫉妬だったのではという話もあるそうです。

米国第 26 代大統領のセオドア・ルーズベルトが大事にしていたスリッパと言う名の猫は、公式晩餐会であっても、好きなところに陣取り、著名なゲストさえスリッパを気にしながら部屋を移動しなければならなかったという逸話が残されています。

歴史的に著名な人々だけでなく、今日でもロイヤルファミリーや大統領がペットをかわいがる姿がテレビ画面などに映し出されると、私たちは妙に彼らに親近感や好感を持つことがあります。ペットを愛する気持ちというのは、同じペトラバーであれば誰でも共有することができ、遠い世界の人々との距離までも縮めてくれるのでしょう。

\*\*\*

マース ジャパンは、製品や社会貢献活動を通して、人とペットが共に暮らす笑顔あふれる社会の実現を目指しています。このニュースレターは、マース ジャパンが人とペットの共生をテーマにした研究や支援活動を目的に 1997 年に設立したリサーチセンターである非営利団体コンパニオンアニマル リサーチ (CAIRC) とマース オーストラリアがサポートするコンパニオンアニマルに関わる活動を推進している PIAS と協力して発行しています。